

栗国島の鳥類

高原 建二*・中村 和雄**・又吉 盛泰***・橋本 幸三†・比嘉邦昭‡

Bird Fauna in Aguni Island, the Ryukyu Islands

Kenji Takehara, Kazuo Nakamura, Moriyasu Matayoshi, Kouzo Hashimoto
and Kuniaki Higa

琉球列島に属する栗国島で観察された鳥類を、1998年以来筆者らが行ってきた現地調査を基に、他の観察例を加えてまとめた。その結果、170種が確認された。これを生息状況で見ると、留鳥が22種（13%）、夏鳥が7種（4%）、冬鳥・旅鳥が141種（83%）で、冬鳥・旅鳥が圧倒的に多かった。これから、「栗国島の鳥類目録」を作成した。

また、栗国島における野鳥の方言名の収集を行ったところ、スズメやヒヨドリなどの21種の方言名を収集できた。

アジア大陸からの渡り鳥の通過点である本島は、バード・ウォッチャーたちに魅力ある観察場所を提供するが、さらにこの島の特徴的な地形や植物相とともに、エコツーリズムのための資源を提供するほか、環境教育の場としても利用できるであろう。

キーワード：鳥類相、栗国島、方言名、エコツーリズム、環境教育

Bird species in Aguni Island, the Ryukyu Islands, observed by authors since 1998 and by other persons totaled 170 species. These are classified into the followings: i.e., the residents are 22 species (13%), summer visitors 7 species (4%) and passing birds and winter visitors 141 species (83%). These were listed as a table, "Bird Lists Observed in Aguni Islands".

We also tried to collect the dialects of the name of bird species from some residents, obtaining the name of 21 species such as the sparrow and bulbul.

We proposed an idea that they can provide this island to bird watchers as an interesting and attractive site to observe the passing birds and winter visitors from the Asian continent. Bird fauna, together with the special land features and flora in this island, will also provide the resources of an eco-tourism and the training fields for nature educations.

Key words： Bird fauna, Aguni Islands, Dialect name of birds, Ecotourism, Nature education

はじめに

鳥類は生態系の中で上位に位置する生物であり、「環境指標生物」としての鳥類の生息現状を把握することは、島の自然環境の現状を理解する上でひとつのアプローチとして有効であるものと思われる。そうした観点から、筆者らは栗国島において1998年2月から鳥類調査を重点的かつ継続的に行い、その生息状況に関する観察記録等を集積してきた。また、2003～2005年には、文部科学省の科学研究助成費「近海離島」の環境研究班として鳥類調査を実施した。さらに2008年1月

も現地調査を実施した。

栗国島の生物に関する調査報告は、植物では天野（1981）によって外来種を含む127科458種に及ぶ植物目録が作成されている。動物では当山（1980）の調査によって、爬虫類6種、両生類1種、鳥類11種、哺乳類2種が報告されている。また、宮城（1997）は1997年4月の調査で38種の鳥類を記録し、その保全と活用について指摘している。しかしながら、その後鳥類の生息に関するまとまった調査は行われていないのが現状である。

* 沖縄県立美咲養護学校（沖縄大学地域研究所特別研究員）（連絡先）904-0314 沖縄県読谷村古堅74-10, takehark@open.ed.jp

** 沖縄大学法経学部（現、沖縄大学地域研究所特別研究員）

*** 沖縄県栗国村教育委員会（現、栗国村役場）

† 糸満市在住

‡ 沖縄野鳥研究会

今回筆者らの独自の調査記録を基にして、これまでに報告された文献資料や新聞資料等で散見できる観察記録をできるだけ加えて、栗国島における鳥類相の解明と鳥類目録の作成を試みた。さらに、民俗的な関わりのある鳥類の方言名についても調査を行い、消えかかっている動物方言名の採集も試み、人間との関わりについてもいくばくかの知見を得ることができたので報告する。

本報告が栗国島におけるこれまでの自然環境に関する様々な知見と合わせて、学校教育における理科教育や環境学習、エコツーリズムやエコミュージアム等の実施や展開における自然理解に関する資料のひとつとして活用され、さらには島の環境保全を考えるきっかけになれば幸いである。

1. 栗国島の自然環境

栗国島は沖縄島那覇市の西北約57kmの洋上に位置し、面積7.9km²、周囲約12kmのほぼ三角形の島である(図1)。島の最高標高は、南西端にある「筆ん崎(別名、真鼻毛<マナハモ>)」(標高90m)で、そこから島東部にかけて次第に低くなり、島東端のウーグ浜は砂丘を形成している(図2)。

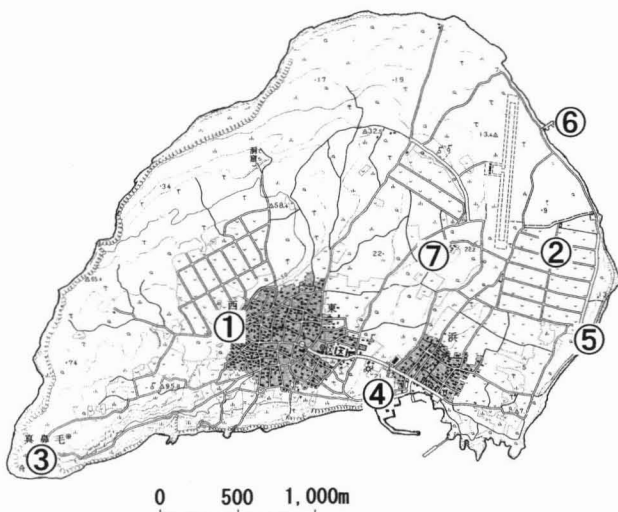


図1 栗国島の地形図(国土地理院発行数値地図を改変)
数字は主要な調査地を示す。

- 1: 大正池や字西の御願周辺, 2: スガイ原土地改良区,
3: 筆ん崎(真鼻毛), 4: 栗国港周辺, 5: ウーグ浜
周辺, 6: 栗国漁港周辺, 7: カナジキ原土地改良区。



図2 東方向上空から望んだ栗国島の景観
左手が筆ん崎方向。

大城(1980)によると、島の地質は栗国島火山岩類と一括される石英安山岩、安山岩質溶岩と同質凝灰角レキ岩、火山碎屑岩があり、これと不整合で覆う琉球石灰岩で構成されている。

こうした地形・地質は、南西端にある筆ん崎に代表されるように、火山碎屑岩である白色凝灰岩で覆われ、他の島に見られない特異な景観を有している。

島の現状としては、島全体が農耕地等の拡大に伴い、森林改変がすすんでいるためまとった森林は少なく、沖縄県指定の天然記念物とされている「字西の御嶽の植物群落」と、ここに隣接する大正池周辺など信仰の対象となる御嶽林が集落周辺にわずかに残存している。しかしながら、最近特に大正池周辺では公園整備がすすみ、森林の改変が進行してきているため、景観が一変している場所も見られる。

2. 調査方法

本調査は2005年10月に、鳥類調査を主体にして島全域を対象に車上及び徒歩による踏査を実施した。主な調査地は、大正池や字西の御願周辺(図1中の①)、スガイ原土地改良区(②)、筆ん崎(真鼻毛)(③)、栗国港周辺(④)、ウーグ浜周辺(⑤)、栗国漁港周辺(⑥)、カナジキ原土地改良区(⑦)などのほか、栗国空港周辺、村営牧場周辺、製糖工場北側ため池などである。

なお、調査資料の一部として、筆者らが過去に実施した4回の現地調査(1998年1月、1998年2月、1998

年10月、2002年1月）も補足資料として活用した。さらに2008年2月の現地調査と、島を訪れる観察者からの鳥類情報も可能な限り収集し、粟国島における鳥類記録の集積に努めた。

また、本調査では、現地調査の際、野鳥と人との関わりについても調査を行い、特に民俗学的な側面から方言名の聞き取り調査による採録も試みた。こうした方言名採録には、例えば、大正時代における琉球の鳥類方言を報告した尚（1918）により、日本では絶滅種の「トキ」が首里方言で識別されていることがあるように、過去に生息していた鳥類が方言として残ることがあり、潜在的な自然環境を理解する上で重要なことを見いだせる場合がある。本調査でも、かつての自然環境とその変遷を知る上でも重要な情報を与えてくれることを期待し、島出身者や島在住の年長者の方々から、著者の一人である又吉と高原が聞き取り調査を実施した。

3. 調査結果と考察

(1) 粟国島で確認された鳥類

これまでに筆者らが観察した鳥類をまとめると、粟国島では合計93種の鳥類が確認された。この今回の観察記録にこれまでに報告されている鳥類記録や島を訪れた野鳥観察者等の観察記録を加味し、粟国島鳥類目録の作成を試みた（付表）。その結果、粟国島で記録のある鳥類は170種になるものと思われる。

その生息状況は、図3に示したように、渡りをしない留鳥が22種（亜種および外来種を含む）、夏季に繁殖のため飛来する夏鳥が7種、沖縄より南の越冬地に渡

る途中、秋季に沖縄を通過する旅鳥や沖縄で越冬する冬鳥が141種である。したがって、留鳥が少なく、夏鳥・旅鳥・冬鳥などの渡り鳥が全体の8割以上を占めていることになる。

留鳥の生息状況としては、集落周辺ではスズメ、イソヒヨドリ、リュウキュウツバメ、シロガシラが確認され、農耕地のような開けた環境では、草原性のセツカやミフウズラの他、キジバト、ハシブトガラスが確認できた。農耕地に隣接して設置されたため池や水路などではバン、カワセミ、リュウキュウヨシゴイなどが確認された。

なお、県内で留鳥とされるカルガモやタマシギ、ゴイサギ、ツミ、リュウキュウサンショウクイなども観察されたが、粟国島で繁殖を行い、定着しているかどうかは不明である。したがって、留鳥とした一部の鳥類については、今後、繁殖確認等の調査が必要であろう。

森林地域ではメジロ、ヒヨドリ、ツミなどが確認されたが、他の島に比較してメジロを見る機会が少ないように思われる。また、森林地域に設置された池（大正池）ではカワセミ、リュウキュウヨシゴイも確認できた。また、海岸や潮が引いた時にできる小干潟やリーフには、クロサギやシロチドリ（写真1）が生息していた。

集落周辺や農耕地などの環境では、県内の他に島と大差ない鳥類の生息状況であったが、島には森林地域がわずかに御嶽林などに残存しているだけであることから、沖縄島の森林地域でふつうに生息するようなカラ類やキツツキ類、ヒタキ類などを欠いていた。

一般に、島の面積とそこに生息する留鳥数との間には有意な正の相関関係が認められることから（樋口、1979）、島面積の小さな粟国島の留鳥数はもともと少ないものと考えられるが、島民が食資源として鳥類を利用するために行ってきた狩猟や、薪を得るための森林伐採、農耕地の拡大に伴う森林の減少のために、鳥類の個体群は直接的あるいは間接的な影響をこうむり、絶滅していった鳥類も多いものと考えられる。

一方、渡り鳥の中には、沖縄県内でもごくまれに飛

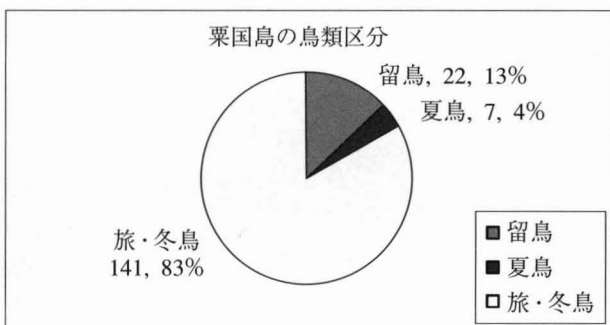


図3 粟国島で確認された鳥類の生息状況

来する迷鳥や数少ない旅・冬鳥として、ブッポウソウ、コクマルガラス（写真2）、キクイタダキ、ムジセッカ（写真3）、ハイイロオウチュウ、カンムリオウチュウ、キビタキ、キレンジャク、コマドリ、トビ、タゲリ（写真4）、ホシムクドリ、シベリアムクドリ（写真5）、ギンムクドリ（写真6）、アサクラサンショウクイなどが確認された。これらの種は隣接する沖縄島でも観察される機会が少なく、観察記録も断片的である。したがって、こうした希少な鳥類が観察される粟国島は、

渡り鳥が集中的に利用する島であるものと考えられる。このような状況は、例えば、石川県沖合の日本海中に位置する舩倉島で、中国大陸や朝鮮半島から飛来する迷鳥が数多く記録されている状況と酷似しているように思われる。したがって、今後、秋季から翌春季までの渡りの期間に飛来する渡り鳥の新たな観察記録が増加すると思われる、さらに野鳥観察者にとっては、「バード・ウォッチング」の最適な場所になる可能性が高いものと考えられる。



写真1. シロチドリ



写真2. コクマルガラス



写真3. ムジセッカ



写真4. タゲリ



写真5. シベリアムクドリ



写真6. ギンムクドリ

(2) 特筆すべき鳥類

a. 留鳥

1) シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

本種は、1976年に比嘉（1976）によって沖縄島糸満市米須で初確認されたもので、現在では沖縄島北部まで分布を広げている。本種の分類的な研究ではタイワンシロガシラとされ、八重山諸島に生息するヤエヤマシロガシラとは亜種が異なるとされていることから、飼育鳥のカゴ抜けや放逐による野生化で定着した外来種と考えられている。

本島における定着経過については、聞き取り調査でもはっきりすることができなかったが、おそらく、沖縄島から島づたいに分布を広げてきた可能性が高い。なお、嵩原ら（2001）によると、最近では久米島でも本種の生息が確認され、沖縄島周辺離島への分布拡大傾向が認められている。

b. 渡り鳥（稀な冬鳥、旅鳥、迷鳥）

1) トビ *Milvus migrans lineatus*

2005年10月29日に、巣飼原の農耕地と栗国港近くの海岸で観察された。本種はごくまれな冬鳥として、県内各地に飛来する。

2) ムジセッカ *Phylloscopus fuscatus fuscatus*

2005年10月30日に、ウーグ近く土地改良地区北側ススキ草原や栽培されるクロタリア（緑肥用作物）の茂みの中で1個体を確認した。本種はまれな冬鳥として沖縄県各地に飛来する。

3) キクイタダキ *Regulus regulus japonensis*

1998年2月15日に真鼻毛に隣接するマツ林や広葉樹林内で1個体が確認された。本種はごくまれな冬鳥として県内各地に飛来するが、観察記録はかなり少ない。

4) コマドリ *Erithacus akahige*

2005年11月4日に著者の一人である橋本によって斃死体が拾得され、同島への飛来が確認された。栗国島では1993年4月に原戸鉄二郎氏（私信）によっても観察記録があり、今回の確認は2例目の

飛来確認となるものである。

本種は屋久島以北の本州や九州、四国では夏鳥として飛来するが、沖縄県ではごくまれな旅鳥として通過するものと考えられ、これまで沖縄島（大島ら、1997）や久米島（嵩原ら、2001）などでも観察記録が見られる。

5) アカヒゲ *Erithacus komadori*

2008年5月4日に森河隆史・貴子の両氏（私信）によって、1個体が確認されている。本種は国指定天然記念物で、環境省による絶滅のおそれのある野生動植物（レッドリスト）では、絶滅危惧Ⅱ類にランクされている貴重種である。最近、アカヒゲの分布に関しては、男女群島や琉球列島のトカラ列島などに生息するアカヒゲの一部が冬季に南下する（渡り）ことが指摘されているので（川路・樋口、1989）、今回目撃された個体は、おそらく沖縄島に生息する亜種ホントウアカヒゲ *E. k. namiyei* ではなく、男女群島やトカラ列島などに生息する基亜種アカヒゲ *E. k. komadori* の飛来（通過）と考えられる。

6) キビタキ *Ficedula narcissina narcissina*

2005年11月4日に著者の一人である橋本によって、♂1個体が確認された。本種は本州では夏鳥として飛来するが、沖縄県では夏鳥としては飛来せず、春季や秋季に旅鳥としての通過である。

7) ハイイロオウチュウ *Dicrurus leucophaeus*

1998年10月3日と4日に、「西御嶽」の森林地域でのべ2個体が、栗国島で初確認された。本種はきわめてまれな迷鳥として国内での記録が見られ、嵩原ら（2000）によると、1996年3月に与那国島に飛来したのが国内初記録である。その後、1997年の2月～3月に西表島に飛来した。同年10月には石垣島と与那国島で観察され、1998年3月～4月に石垣島で再び観察された。1998年9月には沖縄島北部の金武町で観察され、その後10月には栗国島で観察されたことになる。したがって本種の飛来が、栗国島でも観察されたことは特筆す

べきことであろう。

8) カンムリオウチュウ *Dicrurus macrocercus*

2006年4月30日に野鳥愛好家の宮城修氏（私信）によって、西区の農耕地で1個体が確認されている。本種は国内には迷鳥として飛来し、2000年4月に与那国島での観察が国内初記録である（真木・大西，2000）。その後2000年5月には久米島でも記録（捕獲標識）され（嵩原ら，2001），最近では2004年10月に沖縄島でも1個体が観察されている（嵩原ら，2008）。

9) コクマルガラス *Corvus monedula dauuricus*

2005年10月30日に、コクマルガラスの淡色型1個体を村畜産センター周辺で確認した。住民の話では、本個体は同島で半年ほど前から滞在しているという。粟国島では嵩原ら（1995）によって、1994年11月27日に暗色型の飛来記録が知られていることから、今回が2例目の飛来である。また、本種は沖縄県には冬季にごくまれに飛来する冬鳥もしくは迷鳥と考えられているが、今回の観察によって越夏する例もあることが確認された。

(3) 野鳥の方言名

本調査では野鳥と人との関わりのひとつとして、民俗学的な側面から方言名の採録を試みた結果、スズメやヒヨドリ、アカショウビンなど21種についての方言を採録することができた（表1）。この中にフクロウ類として「マイテイクク」と「マイヂクク」の2個の方言名が得られたが、これらはコノハズクやアオバズクなどに当てられた方言名と考えられる。したがって、これらのフクロウ類は方言名があるように身近な野鳥のひとつであった可能性が考えられる。しかしながら、島に在住する筆者らによって調査以前の生息確認はなされているが、本調査期間では森林依存性の高いフクロウ類の生息は確認できず、最近の確認でも十数年前から確認されていないという。このことから、現在、森林環境の減少により、留鳥のフクロウ類が生息している可能性は低いように見え、場合によっては留鳥と

して生息するフクロウ類は今日では激減している可能性が考えられる。また、沖縄島で一般的に知られているゴイサギ（ユーガラサー）やバン（クミラー）の2種の方言名は採録できなかった。これらは湿地に生息する鳥類であり、粟国で湿地が少ないことで確認されることが少なく、方言名がつかなかったものと思われる。さらに、野鳥の方言名は、集落により若干差異が認められたが、これらの鳥類は方言名により識別され、人間との関わりの深い生物として認識されていたことが理解された。

なお、今回の調査は短期間で、方言名の採録のみに留めてあるため、調査はかなり不備である。今後、継続的な聞き取り調査を行うことで、さらに野鳥の方言名の採集数は増加するものと考えられるが、これは今後の調査課題であろう。また、言語学的な比較検討に

表1 粟国島における野鳥の方言名

和名	方言名① (60代男性)	方言名② (70代男性)	方言名③ (70代男性)
スズメ*	クラーグラー	クラーグラー	
メジロ	ソーミナー	ソーミナー	ソーミナー
キジバト	ホートゥー	ホートゥー、 ヤマホートゥ	ホートゥー
ヒヨドリ	テデイクン、 チヂクン	ジージャー、シュ ーサー、スーサー	テデイクン（浜）、 チヂクン（東）
カラス	ガラシ、ガラサー	ガラシ	
ミフウズラ	ウジラ	ウジラ	ウジラー
ツバメ類			マッテラーグラー （東）、アマッテマ
クロサギ	クロサージ		
シラサギ類	シルサージ、 シルガナ	シルサギ、サージ	サージ
シギチドリ類		チジュイ	
カモ類	カモグラー	カム	
タカ類	ヒンサ	タカ、ヒンサ	ヒンサグアー
サシバ		サシバ、タカ	
セッカ			チンチナー
シロチドリ		ハマチジュイ	チジュヤー
ウグイス	マツチリ小、 チュツチュイ小	チュツチュイ小	
イソヒヨドリ		チヂクン	
ゴイサギ	――	――	――
バン	――	――	――
アカショウビン			クカルトウイ
フクロウ類	マイテイクク、 マイヂクク	マイテイクク	
カモメ類	カモ小	チジュイ	
アジサシ類		チジュイ	

* 戦前は、島に分布しなかったという（兼浜氏私信）。
「浜」、「東」は集落名。

についても、今後の課題であろう。

4. 鳥類の保護と自然環境の保全

本村（島）は現在、農業基盤整備事業としての土地改良事業が進み、その結果、島の大部分が農耕地で占められている。他には住宅地としての字東と字浜の二つの集落があり、前述したように、森林地域はわずかに西の御嶽などの御嶽林に残存しているだけである。したがって、前述したように沖縄島の森林地域でふつうに留鳥として生息するようなカラ類やサンショウクイ類、キツツキ類、ヒタキ類などを欠いている鳥類相であった。

島面積の小さな栗国島（7.63km²）のような島では、島面積一種数の関係から留鳥の種数はもともと少ないことが指摘されている（樋口，1979）。ただし、栗国島とその周辺の9島における留鳥数を種数－面積関係から分析した結果では、栗国島に現存する留鳥数は、種数－面積関係からの期待値よりも多かった（中村・高原，2008）。

栗国島よりも面積の大きい大東諸島（南大東島：30.57km²，北大東島：11.94km²）では、島への定住が開始されてからわずか100年余りの間に、それまで島を覆っていた森林が伐採され、大部分がサトウキビ畑に変わってしまった。この過程で、ダイトウヤマガラやリュウキュウカラスバト、ダイトウハシナガウグイス、ダイトウミソザイの4種（亜種含む）が絶滅した（日本鳥学会，2000）。さらに現在、同諸島では固有亜種であるダイトウノスリの生息状況が不明で、亜種ダイトウコノハズクもその種の存続が危ぶまれている。

このことから、大東諸島よりも面積が小さな栗国島でも、大東諸島と同様に進められてきた森林改変等によって、鳥類の個体群が相当大的な影響を受けてきたことが考えられる。ただ、大東諸島が最も近い沖縄島より、360km離れているのに対して、栗国島は沖縄島よりわずか60kmであり、さらに近くに久米島、渡名喜島、慶良間諸島などが存在する分、ここからの侵入等があり、その絶滅をやわらげていることが考えられる。

しかしながら、個体群からの隔離距離が短いメリットはあっても、生息地面積が小さいことは、絶滅に対し決定的な要因となろう。

今日でも人為的な影響は見られる。公園整備を行う過程で大正池周辺の森林の一部が消失したのは、鳥類の生息環境を保全する上で大きな痛手であろうし、自然資源の喪失につながるものであろう。

鳥類は食物連鎖の上位に位置する動物で、鳥類を保護するためには、鳥類の生存をささえる多様な生物の存在が不可欠である。つまり、餌資源となる植物の果実や昆虫等の小動物の生息が保証されないと、これに依存的に生息している鳥類の生息は保証されない。したがって、これ以上留鳥の種数が減少しないように、森林の回復や保全を図り、さらに湿地や干潟等の鳥類の生息環境を保全していくことが大切であろう。そうすることで、島にすむ住民の生活環境を緑豊かな潤いのある環境に整えることができ、さらには学校教育における環境学習や理科学習への活用ができるであろう。

また、最近の野外観察、とりわけ「バード・ウォッチング」への関心には高いものがあり、栗国島で記録された数々の飛来種には希少で特筆すべきものが数多く見られることから、こうした情報の発信により「バードウォッチング・アイランド」として島を訪れるバードウォッチャーの増加が期待できるものと思われる。そうしたニーズに応じていくためにも、積極的に植林を進めるなど森林環境を保全し、さらには湿地や沼地などの水辺環境の保全と創出等により、鳥類を支える多様な生物種を増加させれば、本島がエコ・ツーリズムや、島全体を博物館として位置づけるエコミュージアムを展開できる「場」としての活用が期待でき、かつ「資源」（あるいは自然資産）としてのストックにつながるものといえる。

さらに、前述したように栗国島は島西部に白色の凝灰岩が路頭し、他の島では見られない特異な地質現象がみられ、独特の景観を有している。また、天野（1981）によると、琉球列島では沖永良部島と栗国島だけに自生するヤマコンニャクや、本土では関東東海岸

から伊豆、九州南端、屋久島、トカラ列島に分布し、琉球列島では粟国島にだけ分布するマルバアキグミが自生している。さらに沖縄島北部や久米島などに多いイタジイやアデク等の自生も知られるなど独特の興味深い植物の分布も見られる。鳥類の保全と合わせて、こうした自然の資産が減少もしくは改変を受けないように保全し、エコツーリズムやエコミュージアムへの活用や学校教育等への活用をさらに推進していくことが望まれる。そのためには多くの村民がエコミュージアムを担う「学芸員」としての自覚を持ち、地形や地質をはじめ、動植物全般にわたって知識を広め、島の自然環境について深く理解するとともに、これを伝え、次の世代にまで残すことができるような自然環境の保全に責任をもつことが重要であろう。

謝辞

本研究の一部は、平成15年度～17年度科学研究費補助金基礎研究（B）「過疎化・超高齢化に直面する沖縄『近海離島』における持続的発展モデルの構築」として行った。本研究の遂行のために、以下の方々にお世話になった。粟国村教育委員会の伊良皆賢哲教育長、他職員一同には、現地調査に際して車両の提供等の便宜をはかっていただいた。また、粟国村役場の新里親房氏、沖縄野鳥の会の宮城国太郎氏、宮城靖子氏、天野洋祐氏、新城公次氏、森河隆史氏、森河貴子氏、森河東洋蝙蝠研究所の田村常雄氏、安慶田中学の原戸鉄二郎氏、つくば農林野鳥の会池長裕史氏、野鳥愛好家の宮城修氏の各氏には、貴重な野鳥情報を提供していただいた。また、同村出身で沖縄県立博物館友の会の兼浜信規氏には、鳥類の方言名の収集に協力いただいた。これらの方々に心から感謝申しあげる。さらに、本報告書のまとめに有益な資料を提供いただいた沖縄大学地域研究所特別研究員の渡辺康志氏に感謝申し上げる。

参考文献

- 天野鉄夫, 1981, 『粟国島植物目録』, 粟国村教育委員会, 39pp.
- 大城逸朗, 1980, 「粟国島の地形と地質」『沖縄県立博物館総合調査報告書Ⅰ, 粟国島』 沖縄県立博物館, 39-49.
- 大島成生・金城道男・村山望・小原祐二・東本博之, 1997, 『沖縄島北部における貴重動物と移入動物の生息状況及び移入動物による貴重動物への影響』（財）日本野鳥の会やんばる支部, 86pp.
- 比嘉邦昭, 1976, 「私の見た沖縄本島南部の珍鳥」『野鳥』 41:650-651.
- 樋口広芳, 1979, 「島にすむ鳥の生態」『サイエンス』 9(8):74-88.
- 川路則友・樋口広芳, 1989, アカヒゲ *Erithacus komadori* の分布ならびに亜種の問題について. 昭和63年度特殊鳥類調査. 環境庁. 71-88.
- 宮城邦治, 1997, 「粟国島の自然と観光の可能性」『平成9年度沖縄国際大学教授陣による粟国島地域活性化講座』. 粟国村. 1-6.
- 真木広造・大西敏一, 2000, 『日本の野鳥590』, 平凡社.
- 中村和雄・嵩原建二, 2008, 「沖縄島西方諸島の留鳥種数と留鳥相」『地域研究』 4:35-41.
- 日本鳥学会, 2000, 『日本産鳥類目録, 改訂第6版』, 日本鳥学会, 345pp.
- 嵩原建二・久貝勝盛・瀬名波任, 1995, 「最近（1994年4月～1995年3月）沖縄島及びその周辺離島で保護及び観察された興味深い鳥類について」『沖縄県立博物館紀要』 21:209-211.
- 嵩原建二・池長裕史・金城道男・渡久地豊・金城輝男・庄山守, 2000, 「沖縄県内において野外観察や傷病鳥の保護及び博物館収蔵標本等により確認された興味深い鳥類の記録」『沖縄県立博物館紀要』 26:27-46.
- 嵩原建二・前原一統・嘉手苅初子・松田史郎, 2001, 「久米島における最近の鳥類記録について」『久米島自然文化センター紀要』 1:1-19.
- 嵩原建二・砂川栄喜・比嘉邦昭・宮城国太郎・高良淳司・金城輝男・仲地邦博・長嶺隆, 2008, 「沖縄県内における2003年から2006年までの希な鳥類の飛来記録と希少な繁殖記録」『南島文化』 30:127-144.
- 当山昌直, 1980, 「粟国島の陸上脊椎動物」『県立博物館総合調査報告書Ⅰ, 粟国島』, 沖縄県立博物館, 51-56.
- 尚景, 1918, 「琉球産鳥類の方言名」『鳥』 2:58-60.

付表：粟国島の鳥類目録（2008 年）

和 名	学 名	種別	備考（私信等）
カイツブリ目			
カイツブリ科			
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>	冬鳥？	（県内留鳥）
ペリカン目			
カツオドリ科			
カツオドリ	<i>Sula leucogaster plotus</i>	夏鳥	
ウ科			
ウミウ	<i>Phalacrocorax capillatus</i>	冬鳥	
（備考：アタク（ウ類の方言名）ジー（岩）が東海岸に所在）			
コウノトリ目			
サギ科			
ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis sinensis</i>	冬鳥	（E）
2006/4/30（浜地区）			
リュウキュウヨシゴイ	<i>Ixobrychus cinnamomeus</i>	留鳥	
ミゾゴイ	<i>Gorsakius goisagi</i>	旅鳥・冬鳥	
ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i>	留鳥・一部冬鳥	
ササゴイ	<i>Butorides striatus amurensis</i>	冬鳥	
アカガシラサギ	<i>Ardeola bacchus</i>	冬鳥	（B, G）
2006/4（1羽）, 2008/5/4（1羽）			
アマサギ	<i>Bubulcus ibis coromandus</i>	旅鳥・冬鳥	
方言名：サージャー（サギ類全般）			
ダイサギ	<i>Egretta alba alba</i>	冬鳥	
チュウサギ	<i>Egretta intermedia intermedia</i>	冬鳥	
コサギ	<i>Egretta garzetta garzetta</i>	冬鳥	
方言名：カーサージャー（サギ類全般）			
クロサギ	<i>Egretta sacra sacra</i>	留鳥	
アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i>	冬鳥	
カモ目			
カモ科			
カルガモ	<i>Anas poeciorhycha zonorhyncha</i>	冬鳥？	（県内留鳥）
コガモ	<i>Anas crecca crecca</i>	冬鳥	

ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	冬鳥
2005/11/16 (5) (貯水池)		
オナガガモ	<i>Anas acuta acuta</i>	冬鳥
シマアジ	<i>Anas querquedula</i>	冬鳥
ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	冬鳥
キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	冬鳥
タカ目		
タカ科		
ミサゴ	<i>Pandion haliaetus haliaetus</i>	冬鳥
トビ	<i>Milvus migrans lineatus</i>	冬鳥
2005/10/29 (1) (巣飼原農耕地)		
オオタカ	<i>Accipiter gentilis fujiiyamae</i>	冬鳥
2006/5/3～5/5(若1) (東・浜地区農耕地)		
アカハラダカ	<i>Accipiter soloensis</i>	旅鳥
リュウキュウトツミ	<i>Accipiter gularis iwasakii</i>	留鳥(繁殖未確認)
(渡り個体?), 方言名: ペンサー		
ハイタカ	<i>Accipiter nisus nisosimilis</i>	冬鳥
ノスリ	<i>Buteo buteo japonicus</i>	冬鳥
サシバ	<i>Butastur indicus</i>	旅鳥・冬鳥
チュウヒ	<i>Circus aeruginosus spilnotus</i>	冬鳥
ハヤブサ科		
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus japonensis</i>	冬鳥
チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus interstinctus</i>	冬鳥
アカアシチョウゲンボウ	<i>Falco amurensis</i>	冬鳥(まれな迷鳥)(B)
ツル目		
ミフウズラ科		
ミフウズラ	<i>Turnix suscitator okinavensis</i>	留鳥
方言名: ウジラ(浜)		
クイナ科		
リュウキュウヒクイナ	<i>Porzana fusca phaeopyga</i>	留鳥
シロハラクイナ	<i>Amaurornis phoenicurus chinensis</i>	留鳥
バン	<i>Gallinula chloropus indica</i>	留鳥
オオバン	<i>Fulica atra atra</i>	冬鳥
チドリ目		
タマシギ科		
タマシギ	<i>Rostratula benghalensis benghalensis</i>	留鳥/冬鳥(繁殖不明)

チドリ科

コチドリ	<i>Charadrius dubius curonicus</i>	冬鳥	(A)
シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus nihonensis</i>	留鳥	
メダイチドリ	<i>Charadrius mongolus stegmanni</i>	冬鳥	
ムナグロ	<i>Pluvialis fulva</i>	冬鳥	
ダイゼン	<i>Pluvialis squatarola</i>	冬鳥	
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	冬鳥	

シギ科

キョウジョシギ	<i>Arenaria interpres interpres</i>	旅鳥	
トウネン	<i>Calidris ruficollis</i>	冬鳥	
ヒバリシギ	<i>Calidris subminuta</i>	冬鳥	
ウズラシギ	<i>Calidris acuminato</i>	冬鳥	(G)

2006/5/2(東地区農耕地) , 2008/5/6(1)

ハマシギ	<i>Calidris alpina sakhalina</i>	冬鳥	
ミユビシギ	<i>Crocethia alba</i>	旅鳥・冬鳥	
エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i>	旅鳥	
アカアシシギ	<i>Tringa totanus ussuriensis</i>	旅鳥・冬鳥	
コアオアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>	旅鳥・冬鳥	
アオアシシギ	<i>Tringa nebularia</i>	旅鳥・冬鳥	
クサシギ	<i>Tringa ochropus</i>	冬鳥	
タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	冬鳥	
キアシシギ	<i>Heteroscelus brevipes</i>	旅鳥	
イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	冬鳥	
ソリハシシギ	<i>Xenus cinereus</i>	旅鳥	
ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata orientalis</i>	旅鳥	
チュウシャクシギ	<i>Numenius phaeopus variegatus</i>	旅鳥・冬鳥	(G)

2006/5/2(浜地区) , 2008/5/5(1)

コシャクシギ	<i>Numenius minutus</i>	旅鳥(まれ)	(E)
--------	-------------------------	--------	-----

2006/5/2(浜地区)

ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i>	冬鳥	
タシギ	<i>Gallinago gallinago gallinago</i>	冬鳥	
チュウジシギ	<i>Gallinago megala</i>	冬鳥	

2006/5/2(浜地区)

セイタカシギ科

セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus himantopus</i>	旅鳥・冬鳥	
--------	---	-------	--

ツバメチドリ科

ツバメチドリ	<i>Glareola maldivarum</i>	夏鳥	
--------	----------------------------	----	--

カモメ科

ユリカモメ	<i>Larus ridibundus</i>	冬鳥	
ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	冬鳥	
クロハラアジサシ	<i>Sterna hybrida javanicus</i>	旅鳥	
ベニアジサシ	<i>Sterna dougallii bangsi</i>	夏鳥	
エリグロアジサシ	<i>Sterna sumatrana</i>	夏鳥	
コアジサシ	<i>Sterna albifrons sinensis</i>	夏鳥	(G)

2008/5/5 (1)

ハト目

ハト科

リュウキュウキジバト	<i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i>	留鳥	
ズアカアオバト	<i>Sphenurus formosae permagnus</i>	留鳥	
ベニバト	<i>Streptopelia tranquebarica</i>	迷鳥(稀な冬鳥)	(A)

カッコウ目

カッコウ科

ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus poliocephalus</i>	旅鳥	
カッコウ	<i>Cuculus canorus telephonus</i>	旅鳥	

2008/5/5 (1)

(G)

フクロウ目

フクロウ科

コミミズク	<i>Asio flammeus flammeus</i>	冬鳥	
リュウキュウコノハズク	<i>Otus elegns elegans</i>	留鳥?(繁殖未確認)	
リュウキュウアオバズク	<i>Ninox scutulata totogo</i>	留鳥?(繁殖未確認)	

アマツバメ目

アマツバメ科

ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus candacutus</i>	旅鳥	(D)
ヒメアマツバメ	<i>Apus affinis subfurcatus</i>	旅鳥	
アマツバメ	<i>Apus pacificus kurodae</i>	旅鳥	(D)

ブッポウソウ目

カワセミ科

ヤマショウビン	<i>Halcyon pileata</i>	旅鳥まれ	
2006/5/3-5/5(1)(浜地区農耕地), 2008/5/6(1)			(G)
リュウキュウアカショウビン	<i>Halcyon coromanda bangsi</i>	夏鳥	
カワセミ	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>	留鳥	

ブッポウソウ科

ブッポウソウ *Eurystomus orientalis calonyx* 旅鳥まれ (D)

ヤツガシラ科

ヤツガシラ *Upupa epops saturata* 旅鳥 (まれ)

スズメ目

ヒバリ科

ヒバリ *Calandrella arvensis japonica* 冬鳥 (まれ)

ツバメ科

ショウドウツバメ *Riparia riparia ijimae* 旅鳥

ツバメ *Hirundo rustica gutturalis* 旅鳥

リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica namiyei* 留鳥

コシアカツバメ *Hirundo dauric japonica* 旅鳥

セキレイ科

ツメナガセキレイ *Motacilla flava taivana* 旅鳥

キガシラセキレイ *Motacilla citreola citreola* 旅鳥

2008/5/5(雌 1) (G)

キセキレイ *Motacilla cinerea robusta* 冬鳥

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens* 冬鳥

ホオジロハクセキレイ *Motacilla alba leucopsis* 冬鳥

タイワンハクセキレイ *Motacilla alba ocularis* 冬鳥まれ

2005/11/15-11/17 (5) (東地区農耕地・浜地区農耕地)

マミジロタヒバリ *Anthus novaeseelandiae sinensis* 冬鳥

ビンズイ *Anthus hodgsoni hodgsoni* 旅鳥・冬鳥

ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus* 冬鳥

タヒバリ *Anthus spinoletta japonicus* 冬鳥

サンショウクイ科

アサクラサンショウクイ *Coracina melaschistos intermedia* 旅鳥 (まれ) (F)

2006/10 (1)

サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* 旅・冬鳥 (A)

リュウキュウサンショウクイ *Pericrocotus divaricatus tegimae* 留鳥? (漂鳥) (A)

ヒヨドリ科

リュウキュウヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis pryori* 留鳥

タイワンシロガシラ *Pycnonotus sinensis formosae* 留鳥 (外来種)

モズ科

モズ	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i>	冬鳥
シマアカモズ	<i>Lanius cristatus lucionensis</i>	冬鳥

レンジャク科

キレンジャク	<i>Bombycilla garrulous centralasiae</i>	冬鳥 (まれ)	(C)
ヒレンジャク	<i>Bombycilla japonica</i>	冬鳥	

2005/11/15 (1) (大正池付近)

ツグミ科

コマドリ	<i>Erithacus akahige akahige</i>	旅鳥
------	----------------------------------	----

2005/11/15 (1)

アカヒゲ	<i>Erithacus komadori komadori</i>	旅鳥・冬鳥(?)
------	------------------------------------	----------

2008/5/4(1)

(G)

ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>	冬鳥	
ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus cyanurus</i>	冬鳥	(A)
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus aureus</i>	冬鳥	
ノビタキ	<i>Saxicola torquata stejnegeri</i>	冬鳥	
イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius philippensis</i>	留鳥	
アカハラ	<i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i>	冬鳥	
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	冬鳥	
マミチャジナイ	<i>Turdus obscurus</i>	冬鳥	

2005/11/16(1) (洞寺公園付近)

ツグミ	<i>Turdus naumanni eunomus</i>	冬鳥
ハチジョウツグミ	<i>Turdus naumanni naumanni</i>	冬鳥

ウグイス科

ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	冬鳥	
ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	冬鳥/留鳥?	
チョウセンウグイス	<i>Cettia canturians</i>	冬鳥	(C)
エゾムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	冬鳥	
ムジセッカ	<i>Phylloscopus fuscatus fuscatus</i>	冬鳥	
キマユムシクイ	<i>Phylloscopus inornatus inornatus</i>	冬鳥	
キクイタダキ	<i>Regulus regulus japonensis</i>	冬鳥	
セッカ	<i>Cisticola juncidis brunniceps</i>	留鳥	

方言名：チンチナー

ヒタキ科

キビタキ	<i>Ficedula narcissina narcissina</i>	旅鳥まれ
------	---------------------------------------	------

2005/11/16 ♂・♀各1羽 洞寺公園付近

オジロビタキ	<i>Ficedula parva albicilla</i>	冬鳥	
オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	旅鳥	(A)
エゾビタキ	<i>Muscicapa griseisticta</i>	旅鳥	
コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica dauurica</i>	旅鳥	

2008/5/6(1) (G)

サメビタキ	<i>Muscicapa sibirica sibirica</i>	旅鳥	
-------	------------------------------------	----	--

カササギヒタキ科

リュウキュウサンコウチヨウ	<i>Terpsiphone atrocaudata illex</i>	夏鳥	
---------------	--------------------------------------	----	--

メジロ科

リュウキュウメジロ	<i>Zosterops japonicus loochooensis</i>	留鳥	
-----------	---	----	--

方言名：ソーミナー

ホオジロ科

シロハラホオジロ	<i>Emberiza tristrami</i>	冬鳥 (まれ)	
ホオアカ	<i>Emberiza fucata fucata</i>	冬鳥 (まれ)	
コホウアカ	<i>Emberiza pusilla</i>	冬鳥 (まれ)	
カシラダカ	<i>Emberiza rustica latifascia</i>	冬鳥	
キマユホオジロ	<i>Emberiza chrysophrys</i>	冬鳥 (まれ)	
ミヤマホオジロ	<i>Emberiza elegans elegans</i>	冬鳥	
シマアオジ	<i>Emberiza aureola ornata</i>	冬鳥 (まれ)	
シマノジコ	<i>Emberiza rutila</i>	冬鳥	
2008/5/6(1)			(G)
アオジ	<i>Emberiza spodocephala personata</i>	冬鳥	
シベリアアオジ	<i>Emberiza spodocephala spodocephala</i>	冬鳥 (まれ)	

アトリ科

アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i>	冬鳥	
マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	冬鳥	
コイカル	<i>Eophona migratoria migratoria</i>	冬鳥 (まれ)	
イカル	<i>Eophona personata personata</i>	冬鳥	
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>	冬鳥 (まれ)	

ハタオリドリ科

スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	留鳥	
-----	----------------------------------	----	--

ムクドリ科

シベリアムクドリ	<i>Sturnus sturninus</i>	冬鳥 (まれ)	
----------	--------------------------	---------	--

2007/1/12 (1)

コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	旅鳥
ホシムクドリ	<i>Sturnus vulgaris poltaratskyi</i>	冬鳥 (まれ)
ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	冬鳥
ギンムクドリ	<i>Sturnus sericeus</i>	冬鳥 (まれ)

2005/11/5 (5) (大正池付近)

オウチュウ科

ハイイロオウチュウ	<i>Dicrurus leucophaeus</i>	迷鳥
オウチュウ	<i>Dicrurus macrocercus</i>	迷鳥 (B)
カンムリオウチュウ	<i>Dicrurus hottentotus</i>	迷鳥 (E)

2005/4/30 (1) (西地区農耕地)

カラス科

コクマルガラス	<i>Corvus monedula dauuricus</i>	迷鳥
ミヤマガラス	<i>Corvus frugilegus pastinator</i>	冬鳥 (まれ)
リュウキュウハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos connectens</i>	留鳥

方言名：ガラシ，ガラサー

備考

1. 本目録は宮城（1997）の目録（A）を基本にして、その後、本調査で確認された種や鳥に訪れた観察者等の記録を追加して作成したものである。
2. 目録は和名，学名，種別（留鳥と渡り鳥の別），確認地，個体数，確認期日，文献，方言名等の順とした。
3. 和名と学名の扱い及び順序は，日本鳥学会（2000）にしたがった。
4. 観察記録の一部には，宮城（1997）（A）以外に，以下の各氏による観察記録を私信として掲載した。新城公次氏私信（B），田村常雄氏私信（C），宮城国太郎氏私信（D），宮城修氏私信（E），天野洋祐私信（F），森河隆史・貴子私信（G）。